

## 主 題：キリストの福音を生きる教会①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章3－8節

## テーマ：“神様に喜ばれる教会”とは一体どのような姿をしているのか？

今朝皆さんと学んでいきたいのはコロサイ 1章3節からのみことばです。先週から私たちは、使徒パウロの記したコロサイ人への手紙を初めから考え始めました。その続きをきょうも一緒に見ていきたいと思えます。内容に入って行く前に、前回見たことも思い返しながら 1－8節までをお読みします。

コロサイ 1：1－8

「:1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、:2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。:7 これはあなたがたが私たちと同じしるべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。」

“神様に喜ばれる教会” 一体それはどのような姿なのでしょう？どんな特徴を持った信仰者たちの集まりなのでしょう？私たちの周りには確かに「教会」と名のつくものがあります。ネットで調べてみても私たちの教会があるこの堺市西区だけでも少なくとも約20もの教会があります。小さな集まりもあれば大きな集まりもあります。比較的新しくできたものも、長い歴史を持つものも、若い人たちが集まっているようなものから、年配の人が集まっているようなものもあります。私たちの周りにはさまざまなかたちの教会が存在しているのです。そのようにいろいろな教会がある中で、一体神様に喜ばれる教会とはどのような姿を、どのような特徴を持っているのでしょうか？果たして私たち自身は神様の前に喜ばれる群れとして、今を歩んでいるのでしょうか？

先週のことを少し思い返してみてください。私たちは前回この手紙の宛先であったコロサイの教会を取り巻いていた歴史的背景について一緒に考えました。その時にも言いましたが、コロサイの教会というのはパウロによって建てられた教会ではありませんでした。もっと言えば、おそらく彼はこの教会の人々に会ったこともなかったのです。この町の兄弟姉妹のことをパウロはよく知りませんでした。しかしそんな彼のもとに、この教会を始めた人物が助けを求めてやって来るのです。それは、エパfrasでした。悲しいことに、この時コロサイの教会にはいろんな危険が迫っていました。偽教師たちが入り込んで異端が広まるようになっていました。正しい福音を捻じ曲げるような教えがなされていて、キリストだけでは不十分だ、というそんな惑わしによって信仰者たちの間で混乱が生じるようになっていたのです。エパfrasはそのような現状を心配してパウロのもとにやって来ました。パウロは、同じ主を愛する兄弟姉妹たちが苦しんでいると、彼から知らされました。だからこそ、愛にあふれたパウロは彼らを励まそうとしました。「キリストは十分ではない」といった間違った声に対して、パウロは「いや、この方こそすべてにまさって偉大なお方、十分なお方なのだ」とそう手紙を通して改めて教えたので

す。先週も言いましたが、それこそがこの手紙のテーマでもありました。「イエス・キリストこそすべてにまさって偉大で、十分なお方なのだ」と。

ここで興味深いことがあります。パウロはこの手紙を書き送るにあたって、コロサイの教会に起こっていたさまざまな問題に触れる前に、まずあることをしました。何だと思えます？それは、神様に感謝をささげることでした。3節を見ていただくとこうありました。「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」と。挨拶をした後ですぐパウロはそのように続けていたのです。エパfrasからコロサイの兄弟姉妹について知らされたパウロは、いろんな問題に触れるよりも前に、まず初めに、彼らのことを神様に感謝していました。パウロにとって、このコロサイの教会は一度も訪れたことがないところでした。直接見たわけでもなかったのです。しかし彼らの歩みを耳にしたパウロは、ただそれだけで喜びにあふれて感謝していました。その知らせを聞いて、パウロは神様に対して喜んで賛美をしていたのです。一体コロサイの教会の人たちはどんな歩みをしていたのでしょうか？どんな歩みをしていたからパウロはそのことを感謝したのでしょうか？間違いなく言えることは、コロサイの教会は神様に喜ばれる教会として歩んでいた、ということです。もちろん問題が一切なかったわけではありません。手紙の中ではいろんな問題についても触れていくのです。でもそのように問題はあるにしても、そこに集っていた信仰者たちは、キリストの福音を生きている群れとして忠実に歩もうとしていました。ひとりひとりが主を愛して、その栄光のために生きていこうとしていました。だからこそ、パウロは会ったこともなかったけれども、そんな彼らの歩みを耳にして心を動かされ、そのことを神様に感謝していたのです。

では皆さん、私たち自身の歩みはどのようなもののでしょうか？これから私たちは3-8節を一緒に考えていきます。日本語では読み取ることは無理ですが、実を言うと、元々の原文では、この3-8節の6節全部はすべて途切れることのない長い一つの文になっているのです。パウロは「感謝しています」と述べた後、8節までを一気に記していました。この一つの箇所を通して、神様に喜ばれる教会として歩んでいたコロサイの教会のことでパウロは感謝をささげ、そして彼らのうちに見られた三つの特徴というものを教えてくれていたのです。私たちはこの3-8節の箇所で、神様に喜ばれる教会がどんな特徴持っているのか三つのものを見て取ることができます。またこれから見ていけばよくわかることですが、これらの特徴というのは、真の信仰者のうちには、例外なく必ず見られるものです。ですから、これから見ていくそれらの特徴が自分のうちにも見られるのかどうかをよく考えてみましょう。また教会としても考えてみましょう。神様を愛する群れとして、ひとりひとりますます自分自身も主に喜ばれる者として成長していくために、その助けになることを心から祈っています。

では、これから私たちは三つの特徴を考えていきますが、その前にとても大切なことになるのでちょっと立ち止まって、パウロの感謝のことばそのものにもう少し目を向けてみましょう。もう一度3節を見ていただいて、パウロのこのことばは何を言わんとしていたのかを考えてみましょう。3節にこう書いていました。「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」と。先ほども触れましたが、エパfrasからコロサイの教会に関する報告を聞いたパウロは、感謝と喜びにあふれていました。ここで「感謝しています」と訳されていたことば、これには動作の継続を意味する現在形の動詞が使われていました。皆さん覚えていて欲しいのは、継続を意味しているそんな現在形の動詞が使われていたということです。言い換えれば、パウロは一度だけ感謝をしてそれで終わりではなかった、ということです。彼は習慣的にコロサイの兄弟姉妹のことを思うたびに、いつも感謝をささげようとしていたということです。またもっと言えば、それこそパウロという人物の変わらない歩みでもありました。彼はコロサイの教会限定で感謝していたわけではありませんでした。彼はコロサイの教会だけではなくて、ほかの兄弟姉妹を思うたびに、喜びにあふれていつも神様に感謝をささげていたのです。思い返せば、パウロは自分の記した手紙のほとんどすべてにあって挨拶をした後

で、感謝を口にしていました。パウロはいろんな教会に対して手紙を送っていましたが、その中でも、たとえばコリントの教会に送った手紙を見ても、Iコリント1：4にはこう書いていました。「私は、キリスト・イエスによってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも神に感謝しています。」またピリピの教会に宛てて記した手紙の中でもピリピ1：3に「私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、」と。また教会だけではありません。個人に対して送った手紙でも同じでした。ピレモンに対して送った手紙でもピレモン4節にこう書いていました。「私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。」また愛する弟子のテモテに対して送った手紙でもIIテモテ1：3節にこう書いていました。「私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。」と。パウロは繰り返し、繰り返し同じことばを使っていました。「いつも」と。「神に感謝しています」と。間違いなくパウロという人物は、ほかの人のことをいつも心に留めて神様に対して感謝をささげるそのような人でした。「すべての事について、感謝しなさい。」(Iテサロニケ5：18)と自分が口にしていたことを、自らが喜んで実践していたのです。すばらしい模範だと思いませんか?!パウロはいつでも同じ主に従っている兄弟姉妹たちのことを愛して、彼らのこのことを気にかけて祈っていました。何の問題も引き起こさないような、愛を示すのが簡単な人たちだけではありません。さまざまな問題を抱えていたコリントの教会の人々のことも、彼は変わらず祈っていました。また自分がよく知っている教会や兄弟姉妹のことだけを祈っていたのでもありません。訪れたこともないコロサイの教会に対しても変わらず祈っていました。彼はそのようなして同じ主によって救われて、同じ主にあって歩んでいる一つの神の家族に属している兄弟姉妹たちのことを覚えて、いつも神様に向かって感謝をしていたのです。

さて、立ち止まってちょっと考えてみましょう。確かに今私たちが見ただけでも、もう私たちが見習うべき大切な姿勢をパウロのうちに見て取ることができるのですが、でも、それだけではありません。もっとすごいのは、パウロはどのような状況の中でそのことばを口にしていたのか、ということです。考えてみてください。彼は「いつも祈っています、いつも感謝しています」と話していました。しかしそのようなことを口にした時の彼の置かれていた状況は、決して何の問題もない楽なものではなかったのです。たとえば、このコロサイ人への手紙を記した時、パウロは一体どこにいたでしょう?前回も見ましたが、彼はローマの獄中にいたのです。ご存じない方があるかもしれませんが、当時ローマの獄中にあるというのは、文字通り死を意味していました。捕らえられた囚人というのは、餓死したり、闘技場で見世物にして戦わされることもありました。それによって死ぬこともあったのです。また王の命令によって次の瞬間には処刑されてしまうことがあってもおかしくはありませんでした。パウロは先がわかりませんでした。次の瞬間生きるか死ぬか、そのことがわかりませんでした。でもそんな状況の中であって、パウロはほかの人のことに心を留めていたのです。エパfrasから聞かされたコロサイの兄弟姉妹のことをパウロは覚えていました。神様にいつも感謝をささげていたのです。皆さん、パウロはコロサイの兄弟姉妹に直接会ったことはありませんでした。その教会を一度も訪れたことはなかったのです。それでもなお、エパfrasからそれを聞かされて、彼は自分の置かれている状況に心を奪われるのではなく、そのように苦しんでいる兄弟姉妹の状況に心を留めようとしていたのです。自分の生死よりも、苦しんでいる兄弟姉妹たちの霊的な歩みに関心を払っていました。自分の安心や満足というよりも、兄弟姉妹たちがすべてにまさって偉大なキリストに安心や満足を見出すことができるように、と励ましたのです。この対応がとれていたのは、彼が絶望的に思える自分の状況に対して自暴自棄になっていたからではありません。彼が自分の力や意志によってそれを成したのでもありません。彼は、自分自身が信頼しているその神様がどんな時も働かれている、ということを知っていました。彼は、ほかのだけれどもない私たちの父なる神様がともにいてくださる、ということを知っていたのです。パウロは言いました。「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝してい

ます。」と。パウロはまさにそのようにしてほかの人に心を留めて、神様に感謝をささげる人物でした。そうだとすれば、私たち自身はどうでしょう？こんなパウロの姿を私たち自身に当てはめることができるのでしょうか？果たして兄弟姉妹のことを祈って、いつも神様に感謝する者として私たちは歩んでいるのでしょうか？忘れてはいけないこと、それは間違いなくパウロの置かれていた状況は簡単なものではなかったということです。よく知っているとおりに、彼は多くの場合苦しみの中に置かれていました。ほかの誰かのことよりも、自分の必要を求めなければいけないような場面もあったのです。しかしそんな中であってなお、彼は同じ主によって救われて、同じ主を愛して歩んでいる兄弟姉妹たちのことを思って、喜んで仕えようとしていました。

では、先週の一週間の歩みを振り返ってみましょう。果たして私たちは、どれほど自分自身のことを祈って、どれほどほかの兄弟姉妹のことを覚えて祈っていたでしょう？家族や親しい友人だけではありません。教会の家族のために、どれだけ私たちは熱心に祈りをささげているのでしょうか？それとも自分が置かれている状況に心がいつも奪われて、ほかの人たちの霊的成長のために祈ることを忘れていないのでしょうか？また、果たして私たちはほかの兄弟姉妹のことを覚えて祈るときに、その兄弟姉妹のうちに働かれる神様は、自分のうちに働かれる神様と同じ神様ですから、その神様のみわざに期待していつも感謝しているのでしょうか？「感謝しています」と言うかもしれません。では、たとえばいろいろな大きな問題が人々のうちに見えるような場合はどうでしょう？そんな時は感謝を一切忘れてしまって、「神様、どうかあの人の問題を解決してください。」とだけ祈っていないのでしょうか？だとすれば皆さん、よく考えてみましょう。パウロは、コロサイの教会がさまざまな問題を抱えている、とエパfrasから聞かされてきました。その問題は簡単なものではありません。どうでもいいようなものでもありませんでした。イエス・キリストに関する間違っただけの教えが教会に入り込んでいたのです。しかしそんな問題を前にして、パウロがまずしたこと、それは兄弟姉妹の忠実な歩みを覚えて、そんな彼らのために祈りをささげ、そして彼らのうちに働かれる神様に感謝をささげていました。皆さん、私たちも同じように互いのために祈り合うことができます。私たちのうちに働かれる神様は、皆さんの隣に座っている兄弟姉妹のうちにも働かれている神様です。私たちはその働きを期待して感謝しながら歩んでいくことができます。また神様は私たちのこの教会だけではなくて、同じ一つのキリストを愛する神の家族を与えてくださっています。私たちはいろんなところにいるほかの兄弟姉妹のことも、会ったこともないような兄弟姉妹のことも祈ることができるのです。神様の働きを期待しながら、神様にいつも感謝を持って祈る者として、私たちは成長していくことが大切なのです。パウロはそのように愛と感謝にあふれて生きていました。では、私たちはどうでしょう…

### **○神様に喜ばれる教会に見られる三つの特徴 4-8節**

さて、ここまでパウロの感謝のことばを見てきました。エパfrasからコロサイの兄弟姉妹について報告を受けた彼は、大きな喜びにあふれて主を賛美していたのです。では、そのように神様に喜ばれる教会として歩んでいたコロサイの教会の人々は、具体的にどのような歩みをしていたのでしょうか？パウロはどのような特徴を見出したのでしょうか？三つの特徴をこれから考えてみましょう。

#### **1. キリスト・イエスに対する信仰 4a節**

その一つの特徴を4節に見て取ることができます。「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱えている愛のことを聞いたからです。」神様に喜ばれる教会に見られる一つ目の特徴、それは「キリスト・イエスに対する信仰」でした。パウロはそのことをコロサイの教会のうちに見出したのです。これまでも何度か触れてきたように、コロサイの教会というのは最初エパfrasを通してキリストの福音を耳にしました。ちょっと飛んで6と7節、特に6節の後半から7節を見ていただくとこのように記されています。「:6 …福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。:7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。…」と。

エパfrasは熱心に働きました。そしてそんなエパfrasの働きを用いた神様は、人々の間に働いて彼らを救いへと導かれました。コロサイの教会はそのようにして自分たちのもとに届いたキリストの福音を心から信じた、真に救われた者たちの集まりだったのです。そしてそんな彼らの持っているキリスト・イエスに対する信仰、それが確かなものだそう耳にして、パウロは心から神様の働きに感謝していました。

さてここで立ち止まって考えてみましょう。私たちはこの「信仰」ということばをよく耳にします。聖書を読んでいてもいろんなところで目にすることがあるでしょう。ましてやこの「信仰」は、私たちの救いにとって欠かせない要素であることも聖書ははっきりと教えていました。たとえばエペソ2：8節にこう書いていました。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」救いは、私たちから出たものではなく、神様からの賜物なのだ、恵みのゆえに、信仰によって、私たちは救われたのだと。私たちはこのように「信仰」ということばをよく目にします。私たち自身も口にすることもかもしれません。

では皆さん、「信仰」とはそもそも一体どのようなものをいうのでしょうか？だれかから「信仰ってなんですか？」と尋ねられたなら、この大切なことばが、何を意味しているのかを、私たちは本当に自分のこととして理解しているのでしょうか？そのことを教えることができるのでしょうか？聖書は一体どのようにしてこの「信仰」ということばを定義しているのでしょうか？とても大切なものでした。そのことを考える上で、まずこのことばの意味から一緒に考えましょう。この「信仰」と訳されていることばにはもともと「信頼」や「確信」「何かを強く信じること」といった意味を含む「ピステイス」というギリシャ語が使われていました。つまり言い換えてみると、信仰というのは、単なる感情や知識以上のものを指しているということです。「信仰」というのは、何かが真実であるとただ知っていること、ではありません。むしろ、それが本物であるのだと確信し、個人的な信頼を置くことをいうのです。またもつと言うなら（皆さんこれだけ覚えておいてください）「信仰」というのは、神様の約束を、本物である、真実だ、とそう確信し、自分のこととして心から信じること、でした。もちろんその例をみことばの中から見て取ることもできます。思い返してみれば、まさにあのアブラハムがそうでした。創世記15：5-6で信仰の原型となるものを見て取ることができます。そこにはこのように書かれていました。「そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「：5 …「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」：6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」はっきりと記されていました。神様はアブラハムに対して約束をしていました。その約束は人間的に考えれば確かに信じられないほど壮大なものでした。しかしそのことを聞いたアブラハムは、そんな約束を自分のこととしてそのまま信じたのです。主を疑うのではなく、神様が自分に約束されたことは、いつも正しい、いつも真実なものだと信頼し、そのことばに確信を置いたのです。これが「信仰」でした。

そして旧約の聖徒たちはみな、そんな信仰によって救われていました。考えてみれば、確かに彼らは救い主イエス・キリストが来られるよりもはるか前に生きていた者たちでした。実際に救い主の姿を見ることもかありませんでした。しかし、そんな彼らも、将来成し遂げられる約束された神様の救いの約束を信じていたのです。そのように自分たちに示された神様のことばと約束は真実なのだ、自分のこととして信じた彼らは、その信仰によって救われていたのです。そしてこの救いの本質というものは、昔も今も変わることはありません。感謝なことにこの旧約の時と違って、今の新約の時代を生きる私たちは、約束されていた救い主がもうすでに来られたこと、この方がもうすでに成し遂げられたそのみわざをはっきりとみことばのうちに見て取ることができます。明らかにされたそのキリストの福音を、イエス様の十字架と復活のみわざの偉大さというものを、私たちは知ることができるのです。そんな救い主を自分のこととして信じることです。神様のことばと約束が確かに真実なものであるのだ、とそう個

人的な信頼を置くことです。それが「信仰」でした。神学者のウェイン・グルーダムも信仰に関してこのように定義していました。「(信仰とは) 罪の赦しと神様との永遠のいのちのため、イエス・キリストを生きている方として信じること。」

ここまで私たちの信仰について少し見てきましたが、どうでしょう？信仰が何を意味しているのかを改めて考えることができたでしょうか？聖書がどのように定義しているのか、そのことを今一度理解できたでしょうか？もしかしたらまだあまりわからないという方があるかもしれませんので、もう少し深めて考えてみましょう。もう少し深めて、「信仰」というものを構成している、それを成り立たせている少なくとも三つの要素についてちょっと考えてみましょう。三つの要素というのは、「知識」と「同意」と「信頼」になります。この「知識」と「同意」と「信頼」この三つの要素は、聖書的な信仰に絶対に欠かせないものとしてこれまでの歴史においても扱われてきたものでした。では、絶対に欠かすことのできないこの三つの特徴、三つの要素、それらは一体どのようなものなのでしょう？

#### a) 知識

まず一つ目の要素は「知識」です。聖書的な信仰には、まず「知る」ことが欠かせないということです。知ることです。理解することです。正しい信仰には、みことばの真理に対する理解や知識というものが必ず必要になります。言い換えれば、「なんかあんまり知らないけどとりあえず信じましょう」とはならないということです。本当の信仰には、神様のことばや福音が確かな事実であると知って、自分のこととして理解することが求められるのです。知ること、理解することが欠かせませんでした。ジョン・マッカーサー先生もこのように述べています。「真の信仰は知識に基づくものであり、神様が啓示された真理を知ること、その確かで揺るがない基盤があるのです。」真の信仰は知識に基づくものです。だからこそ、私たちにとって約束されていた救い主イエス・キリストが誕生されたということ、完全な神様であり完全な人であるそのような神の御子が、私やあなたのような罪人のために身代わりとなって十字架にかかって死なれたということ、またその後、墓に葬られただけでなく、三日目に死に勝利してよみがえられたということ、そういったキリストの福音に関する真理をまず知ることが欠かせない要素になるのです。パウロはこんなことばを残していました。ローマ10：17に「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」とはっきりと書かれていました。信仰は、何から始まると言われていたのでしょうか？それは、聞くことからでした。キリストについてのみことばや福音の真理を人々が耳にすることがなければ、知ることがなければ、そこに信仰はないというわけです。信仰は気まぐれでも、単なる感情によるものでもありません。それは確かな知識に基づく、よく考えてのものだったのです。しかし同時に、もし私たちの信仰というものがこの知的な理解だけでとどまるのだとすれば、それだけでは不十分なものでした。イエス様と福音の真理というものを、ただ歴史的な事実として認識するだけでは、十分ではないのです。確かに聖書的な信仰には、知識というものは欠かすことができないものでした。でも、それがすべてではありません。かつてヤコブもこんなことを口にしていました。ヤコブ2：19を見るとこう書いています。「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」神様に逆らうような悪霊たちも、神様が唯一の方であるということを知っていました。そのようなことを彼らも信じていたのです。そしてこれと同じようにただ知識としていろいろな聖書の教えや福音のことを知っているだけの人もいるのです。本当の信仰、それは知識だけでは不十分でした。

#### b) 同意

では、知識に加えてどんな要素が本物の信仰には含まれるのか、二つ目の要素は「同意」です。同意することです。聖書的な信仰には、ただ知識として知っているだけではなくて、それらを本当のことだと認めることが欠かせないというのです。キリストの福音を、真実のものとして受け入れるのです。約束されていた救い主が確かに誕生されたと。完全な神様であり完全な人である神の御子が、私やあなた

のような罪人の罪のために、確かに身代わりとなって十字架にかかって死なれたと。その後墓に葬られただけでなく、確かに三日目に死に勝利してよみがえられた。そのようにして自分が耳にしたその真理を、ただ知識として頭に入れるだけではなくて、確かな歴史的な事実であるとそう心から認めるのです。ヘブルの著者もこのように述べていました。ヘブル 11 : 1 で「**信仰は望んでいることがらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。**」と。ですから本当の信仰というのは、知識だけではなく、同意も含まれるものでした。そして、そのどちらかが欠けたなら、そこに信仰はありません。しかし同時に、もし私たちの信仰が単なる同意に留まるのであれば、これもそれだけでは不十分なものでした。キリストの福音をただ知っているだけでも、それらが本当のことだと認めているだけでも、十分ではないのです。そのこともみことばの中に例を見て取ることができます。たとえば、ある夜にイエス様を訪ねてやって来たニコデモがまさにそうでした。ユダヤ人の指導者であった彼は、イエス様に向かってこのように言うのです。ヨハネ 3 : 2 「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません。…」ニコデモは、イエス様が神様から来られた教師であると信じていました。神様がともにおられるからこそ、ほかのだれにもできないようなしるしを行うことができるのだとそう認めてもいました。では、そんな彼に向かってイエス様は何と言われたでしょう。続きにこう書いていました。3 節に「**イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」**」ニコデモは確かにイエス様に関する知識を持っていました。そのことを認めてもいました。しかし彼はこの時、本当の信仰を持っていたわけではなかったのです。罪のない聖書的な救いをもたらす信仰というのは、知識や同意はもちろん欠かせないものでしたが、それだけでは不十分なものでした。

### C) 信頼

だからこそ最後三つ目の要素が不可欠になるのです。聖書的な信仰に含まれる三つ目の要素、それは「**信頼**」でした。もっと言えば、信頼は信頼でも、キリストに対する個人的な信頼、キリストに対する神の約束に対する個人的な信頼、それこそが最後にして絶対に欠かすことのできない本物の信仰の要素だったのです。キリストの福音をただ知識として知っているだけでも、またそれらの内容を本当のことだと認めているだけでもありません。ほかのだれでもない自分自身のこととしてそのことを心から信じ、その身をすべてゆだねるのです。約束されていた救い主が、私のために誕生してくださった。完全な神様であり、完全な人である、そのような神の御子が、私の罪のために身代わりとなって十字架にかかって死んでくださったと。またその後、墓に葬られ三日目によみがえられたこのお方は、今も変わらずに私とともにいてくださっていると。そのようにしてイエス・キリストを自分の救い主として、また自分の主として、心から信じ受け入れるのです。自分自身の愚かさや罪を認めて、ただこの方のもとに助けを求めてやって来て、自分自身のすべてをこの方にゆだねて歩んでいこうとするのです。自分がしてきたことが間違っていたと心から悔い改めて、そして、このようにすばらしい救い主を心から愛して従って生きていこうとするわけです。自分の救い主として、自分の主として従っていくのだと。そこにこそ、真の救いが用意されていました。みことばもこのように約束してくれているのです。ヨハネ 1 : 12 にこう記されていました。「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。**」またヨハネ 6 : 35 でイエス様もこのように言っておられます。「**イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来るものは決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」**」ほかのだれでもなくて、イエス・キリストを自分の救い主として、自分の主として信じ受け入れ、そして従っていくこと、それが三つ目の「**信頼**」という要素でした。

では、果たして私たちの持っている信仰は、これら三つの要素を持っているでしょうか？もしかしたらある人は、今全くイエス・キリストのことを知らないかもしれません。もしかしたらある人は、ずっと教会に通っていたり、いろいろな場所で何度も何度も人から聞いてきたので、福音のことも、みことばについてであっても知識としてはたくさんのもを持っているかもしれません。もしかしたらある人は、キリストやそのみわざについて知っているだけではなくて、それが確かに歴史的な事実なのだとして認めているのかもしれませんが。しかし、もし、あなたが本当にキリストや福音の真理を自分のこととして信じていないのであれば、そこに本当の信仰はない、ということです。この方を自分の救い主として心から信じてすべてをささげて従っていく、そのような自分の主としてあなたが生きていないのであれば、「こんなことをしました」など何をどう言おうとも、聖書が教えている「信仰」を持ってはいない、ということです。だからこそよく自分自身のこととして考えてみてください。みことばが教えているような信仰を、あなたは持っているでしょうか？あなたは自分自身が罪の中に死んで、本来ならば神様の永遠のさばきしか働かない存在なのだとして認めているでしょうか？そんな自分をイエス・キリストだけが唯一救出してくださるお方なのだとして、それがおできになる救い主なのだとして信じているでしょうか？滅んでしかるべき自分のために、神の御子が大きな犠牲を払ってくださったことを、ただ恵みとあわれみのゆえに救いを与えてくださったということ、自分のこととして信じているでしょうか？そんな神様の約束を自分のこととして信じているでしょうか？またそのすばらしい主を愛して、そのような偉大な犠牲を払ってくださったその主を愛して、心からの感謝を持って従っていきたくと、自分の主としてすべてをささげて生きていきたくと、日々そのように願っているでしょうか？どうでしょう？イエス・キリストを自分のこととして、救い主として、主として、信じ受け入れているでしょうか？かつてチャールズ・スポルジョンもこんなことばを残していました。「私の希望が活着ているのは、私が罪人でないからではなく、私がキリストが死んでくださった罪人だからです。私が信託しているのは、私が聖い者であるということではなく、聖くない者であろうと、キリストが私の義であるということです。私の信仰は私が何者であるか、何者でなければならぬか、何を感じ、知っているかではなく、キリストが何者であり、何を為してくださり、そして今何をしてくださっているのかにかかっているのです。ハレルヤ！」まさに私たちも同じですね。私たちにとっての希望は、ただキリストのうちにのみあります。私たちの信託も確信も、ただキリストのうちにのみあります。そして私たちの信仰も、ただキリストのうちにのみあるわけです。

コロサイの教会は、キリスト・イエスに対する信仰が生きていた教会でした。彼らはキリストによって救われて、そしてそのキリストを愛して従って行こうとする、そのような教会でした。問題がなかったわけではありません。しかし彼らは自分たちを罪から救い出してくださった主を覚えて、そしてその主を愛する者として、その主の栄光を現わす者として、生きていこうとしていたのです。だからこそ、パウロはそんな教会を思うたびに神様に感謝をささげていました。パウロはエパfrasからその報告を受けた時に、確かにこの教会に神様が働いてくださったのだと喜んでいたのでした。

では私たちはどうでしょう？私たちはそのような特徴を自分たちのうちに見て取ることができるでしょうか？もちろん、私たちひとりひとは成長しなければならない部分がまだまだたくさんあります。弱さも持っています。私たちはしたくないと思うことをしてしまうこともあります。だからこそ、私たちは互いに祈り合うことが必要なのです。だからこそ、私たちは互いにみことばを教え合うことも、互いに励まし合うことも必要になるのです。私たちはきょう神様に喜ばれる教会の一つ目の特徴を見ました。来週続きを見ていきます。でも皆さん、私たちが学んだこの知識を、ただ知識として留めるのではなくて、主を愛するからこそ、それをともに実践していきましょう。キリストの証しを立てる神様が喜んでくださる教会として、ともに成長していきましょう。